

今はレント。主の復活日は春分の日後の満月直後の日曜日とした西方教会の定め。その前の40日間のことで四旬節、受難節、聖公会は大齋節とも言い、2世紀から主として洗礼準備前の洗礼教育機関を指す。

1955年受洗したわたしはこの間教会での大騒ぎや映画等娯楽は慎む等、牧師から厳しく言われた。この季節、主イエスのイスラエルは預言者エレミヤが見たアーモンド(明治訳では巴旦杏)の花咲き競っている(1:17)。

この時、エルサレム第一教会の最長老としてユダヤ教と基督教が分離し、キリスト教会への迫害厳しい1世紀末、著者ヨハネは湖の大店漁師ゼベダイの息子で、イエスは彼らをご自分の傍に置き、宣教させ、悪霊を追放する権威を持つ12使徒(マルコ3:13)に加え、「雷の子ら」と呼ばれつつも生涯イエスの弟子として人生を全うしている。

すると彼は他の弟子たち同様イエスの一挙手一投足、息づかいに至るまで全てを見尽くしていた。

読まれた御言葉は明治訳では「世にある己の者を愛して、極みまで之を愛し給へり」とある。場所はイエスが二人の弟子に水瓶を運んでいる男の後を追わせてある人の二階の広間(マルコ14:12=行12:12)、イエスの十字架受難と死の前夜パスカ即ち過越しの食事を弟子たちとの最後とするために集まっている。

もっと詳しくは、ヨハネの兄ヤコブが斬首された時、ペテロが御使いに導かれて逃げ帰った獄屋近くヨハネ・マルコの母マリヤの主催した家の二階大広間だ。更にディドモのトマスが、復活のイエスなど誰が信じられるかと恐れて窓という窓、出入りの戸という戸全てロックして息を潜めた場所(ヨハネ20:24)でもあった。

イエスは明日は十字架の死の迫るこの時、世に残る弟子たちを「極みまで」愛された。弟子たちと言ったが「自分の民」(1:11)をも示し、イエスを受け入れ、イエスの名を信じる者を指し極みまでの意味と時間的に最後までを意味する愛である。

極限についてパウロはその愛は広さ、長さ、高さ、深さにおいて人の理解の範囲をはるかに凌駕する(エペ3:18-19)と言った程のもので、この席に座る者誰にもその切迫が伝わる。

その時、イエスは無言のままいきなり食事の席を立ち、上着を脱ぎ、手拭いを腰にして、盥に水を汲み、ペテロも裏切りイスカリオテにも弟子たち同様に足を洗い、手拭いで拭かれた。

「洗足」はイエスの愛が極まり、弟子たちにその背中を見せながらイエス自ら弟子たちに跪いて愛は謙遜であることを示した。

もう一度読む、「イエスはこの世から父のもとへ移るご自分の時が来たことを悟り、世に残る弟子たちを愛して終わりまで、こよなく愛し抜かれた」であり、3節も同様だ。

「神は一切をイエスの手に委ね、イエス自ら神のもとに帰ること、十字架の死の時を悟り、その前夜に及んで、先ずご自分に一番身近に仕えて来た弟子たちをことごとくこの上なく愛されてその足をお洗いになった」とヨハネは言った。

「アガペーとエロース(1938)」を書いたスウェーデンのニーグレンは「エロースは遠きものへの憧れ、アガペーは近き者への愛」のことだと言う。信徒は「悔い改め」をもって教会に集まる。

礼拝は、「福音の御言葉」を聞き、イエスと弟子たちとの最後の晩餐記念の「聖晩餐」に加え、洗足してまで最も身近な者たちを愛しぬかれ、更に世の人が到底及ばぬ限り無き愛に溢れて「愛の極み」が示される場である。